JFL 学習者の複合動詞習得の実態と困難点
ーアンケート調査報告ー

佐野　香織

1. はじめに

複合動詞は、前項動詞(V1)の連用形と後項動詞(V2)の 2 つの動詞からなり、これらの意味の相互作用で意味が成立するもの(松田 2000)である。第 2 言語としての日本語学習者にとって、この複合動詞の習得は上級レベルに至っても困難であることが指摘されている。(森田 1987、姫野 1999、松田 2000、2002)。日本語教育において指導法・教材等をどのようにすべきかが課題となるが、その前提となる基礎的研究は十分であるとはいえない。本稿は、JFL 上級学習者の複合動詞の意味理解方略、習得困難点を明らかにすることを目的に行った探索的アンケート調査の報告である。

2. 先行研究

日本語学習者における複合動詞習得の問題点については、テキストでは単純動詞を学習するが、複合動詞に関しては学習の機会がないまま上級に至る(森田 1987)ことや、学習者の作文における複合動詞過少使用の問題(姫野 1999)などが上げられてきた。この問題点を受け、学習者の困難点を明らかにすることを試みた研究に松田(2000)がある。松田の研究では、複合動詞「～こむ」を対象に調査し、次のような結果を挙げている。

1) 後項動詞が類義的な意味を持つものであると、その意味的差異が分からない。
2) 単純動詞と複合動詞の意味的差異がわからない。(例:「呼ぶ」と「呼びつける」の差異が分からない。
3) 後項動詞の意味的カテゴリー化が難しく、意味付けができない。

一般的に複合動詞は偶発的学習(incidental learning)に委ねられることが多い(松田 2000)が、それが 1～3)のような困難点の原因になるという。

松田(2000)の対象は日本で学習している JSL 環境の日本語学習者であった。口頭でのインプットも少なく、辞書での個人学習がほとんどをしめると予想される JFL 日本語学習者については今だ検証されていない。

3. 調査目的

上記の背景を鑑み、複合動詞習得支援の観点から JFL 学習者の複合動詞習得の実態と困難点を明らかにすることを目指し、以下のように調査目的を設定した。

1) JFL 上級学習者はどのように複合動詞を認識し、学んできたのか。
2) JFL 上級学習者の「～つける」の習得困難点は何か。

4. 調査の概要

4.1 調査の対象者

調査対象者は、日本における夏季集中プログラムに参加中の上級レベル JFL 日本語学習者 2 名(英語母語話者)である。2 名とも北米大学において 4 年間日本語を学習しているが、日本語専攻ではない。日本における学習経験は、合計で 6 ヶ月以下である。

4.2 調査方法

調査対象者に、①フェイスシート、②質問紙　を配り、記入を依頼した。記入時は調査者がその場におり、辞書の使用・友人と相談することがないよう注意した。質問紙教示文は以下の通りである。

1. 「つける」という動詞を知っていますか?
この動詞の意味と例文を書いてください。例文はニュアンスが分かるようにできるだけ詳し書いてください。
2. 1)次の複合動詞を使った例文を「～つける」のニュアンスが分かるようにできるだけ詳しく

書いてください。文の数はいくつでもいいです[1]。

2) それぞれの複合動詞が「知っている語」か「知らない語」かについて、次の①②③④中から選んで書いてください。①自分でもよく使う。②自分では使わない。③意味の類推ができる。④意味の類推は難しい。

また、複合動詞の定義、複合動詞についての学習経験、新出複合動詞に対するストラテジーについてフェイスシートとあわせて質問し、回答を得た。

4.3 調査対象項目

研究対象複合動詞として、「～つける」を選んだ。その理由は①「～つける」は重層的に意味を含んでおり、多義性が指摘されている(武部 1953)②「～つける」は造語力が強く、多くの複合動詞を生成する。(姫野 1999)ことからである。

これら、多義性、造語力の多さが習得を困難なものにすると予想される。

4.4 調査の語彙項目設定

調査語彙の意味的分類は、「～つける」の多義性を考慮し、調査語彙の偏りをなくすことから、姫野(1999)を基にして6カテゴリーを設定した。これらのカテゴリーに当てはまる語を姫野のリストから選択し、各カテゴリー2 語計 12 語を調査語彙とした。リストからの語彙選択は、日常一般的に口頭においても使われているであろうと考えられるものを調査者が選んだ。[2]

5. 結果と考察

5.1 JFL 上級学習者はどのように複合動詞を認識し、学んできたのか

5.1.1 複合動詞の認識

調査対象者2名とも、複合動詞については認識していた。辞書や、テキストに簡単な説明が載っている程度のもので「複合動詞」という項目名を知っていたという。また、「複合動詞とはどのようなものか」という問いには、「2 つの動詞をごうたい(合体)されたことば」(原文のまま)「動詞の 2 つをあわせて作った動詞」という回答をしている。2 名ともおおむね「前項動詞と後項動詞の2つをあわせて一つの動詞となったもの」というように理解しているようであるが、その2項関係の結びつき、意味関係についてははっきりとした認識を持っていない可能性がある。

5.1.2 複合動詞の学習・指導

複合動詞の学習経験・受けた指導について、A は「なんとなく、、」、B は「ちゃんとした複合動詞だけの勉強はしたことがない」との回答であった。A は「たまにテキストで説明がある場合や語彙表や文章の中にあったら、学ぶ」と答えている。JFL 環境においても、学習者の偶発学習や、読解資料で出てきたものに関しては一つ一つ覚えていくが、多義性のあるものに関して意味すべてをとりあげてはいないことを示唆している。また、「ふつう、複合動詞について十分な説明はない」と答えていることからも、学習者にとって複合動詞の意味理解は困難であるが、授業内では取り上げられていないということがうかがえる。

5.1.3 新出複合動詞に対するストラテジー

調査者 A、B ともに「辞書で調べる」と回答している。その中でも B は辞書の引き方にも言及し、「辞書でその言葉全体を引いてみる。なかったら、2 番目の動詞を引いて、そこで複合での意味はときどきあります」と述べている。

さらに「その方法は効果的か」という問いにおいては、辞書のひき方にまで言及している B は「役に立つときとダメなとき、両方よくある」と答えているが、A は「調べても使い方が分からない場合が多い」としている。複合動詞に対する考え方も、一つのまとまった表現としてのみとらえている場合や、後項動詞に重点をおいて調べる方法など、学習者によってバリエーションがあることがうかがえる。このことについては、松田(2000)においても、「V1＋

表 1　姫野(1999)分析枠組みと選択語彙

語彙的複合動詞					統語的複合動詞
ニ格をとるもの			ニ格をとらないもの		
場所への到着	対象への接着 密着	対象への指向(完全な接触を目指す)	接触の強調	その他	習慣
駆けつける 乗りつける	備えつける 縫い付ける	投げつける 呼びつける	踏みつける にらみつける	嗅ぎつける 決めつける	行きつける 使いつける

V2」の組み合わせで意味を推測する可能性は高いが、具体的な方法については様々な方略が見られたことが報告されている。

5.2 JFL 上級学習者の「～つける」の習得困難点は何か。

学習者に行ったアンケートのうち、「～つける」調査語彙項目の既知・未知度と産出文、単純動詞「つける」の意味、の2点から得られた結果から、「～つける」の習得困難点について述べる。

4.4 表 1 で挙げた調査語彙項目の既知・未知度を4 段階(①自分でもよく使う②自分では使わない③意味の類推ができる④意味の類推は不可)で聞き、このうち、①、②を既知、③、④を未知とした。調査対象者2名のうち、どちらかが2項目とも既知としたものを既知語カテゴリー、両者が2項目とも未知としたものを未知語カテゴリーとした。結果は、表2、3に示す。

表2　既知語カテゴリー

		A	B
対象への密着・接着	備えつける	④	②
	縫いつける	④	②
対象への指向	投げつける	④	②
	呼びつける	④	②

表3　未知語カテゴリー

		A	B
場所への到着	駆けつける	④	③
	乗りつける	④	④
接触への強調	踏みつける	②	④
	にらみつける	④	③
その他	嗅ぎつける	④	④
	決めつける	②	③
習慣	行きつける	④	④
	使いつける	④	④

単純動詞「つける」の意味については、次のような回答を得た。

・調査対象者 A:　「ふそく(補足)する」
・調査対象者 B:　「ものとものとがくっつくようにする」

5.2.1 既知語カテゴリー

調査対象者が既知としたカテゴリーは、「対象への密着・接着」(項目：備えつける・縫いつける)、「対象への指向(完全接触)」(項目：投げつける・呼びつける)である。姫野(1999)によると、単純動詞「つける」の原義は「接着・密着」であり、この原義が複合動詞「～つける」の意味理解に大きな役割をはたすとしている。既知語のカテゴリーは、この原義「接着・密着」を強く含んでいるものであるといえる。さらに、単純動詞「つける」の原義の意味を調査対象者がどのようにとらえているかを見ると、B は原義とほぼ同様の意味を持つが、A は「つける」の中心をなす意味ではなく、「補足する」というような周辺的な意味から捉えていることが分かる。このことから、単純動詞「つける」の原義に近い意味を持つ場合は、類推が可能であるが、周辺的な意味から捉えている場合は類推さえ不可能になる可能性が示唆できる。

5.2.2 既知語の産出文

調査対象者 B から得られた産出文(1)を見ると、複合動詞を類推するストラテジー、「前項動詞＋後項動詞」を使用しつつ、「つける」の原義の意味から類推していることが分かる。

(1)　ズボンにこの布を縫いつけて。

しかし、(2a)では類推に成功していない。

(2) a.　*僕をかってに「ばか」と呼びつけないで。
　　b.　僕をかってに「ばか」と呼ばないで。

複合動詞の類推のストラテジーは、たとえ単純動詞の原義を持っていたとしてもいつも成功するわけではない。(1)のように「ものとものとをくっつける」ことが明らかな場合は類推しやすいが、(2a)のように「くっつく」ものが具象ではない場合は類推が難しく、失敗している。(2)は単純動詞「呼ぶ」との意味的な差異が分かりにくい例であることがいえる。

5.2.3 未知語のカテゴリー

調査対象者が未知語としたものは、「場所への到着」「接触への強調」「その他」「習慣」の 4 つである。これらは、既知語とは逆に単純動詞「つける」の原義が弱く、分かりにくい可能性がある。たとえば、「習慣」は調査対象者 2 名ともに「意味の類推もできない」としているものである。姫野(1999)ではこの「習慣」の意味は「何度も繰り返していて慣れている」という意で、原義が含まれていない用法である、としている。このような原義から遠い用法は類推も難しく、理解困難であることがいえる。「習慣」以外の意味カテゴリーも、原義を強く含んでいるとはいえず、類推が困難であることが考えられる。また、原義から遠くなると、「ニュアンス」

的な意味合いが強くなる。例えば、「にらみつける」では「悪い感情を強く出す」ニュアンスがあるが、この「ニュアンス」は意味提示されないことが多い。類推だけでは理解困難であることが指摘できる。

5.2.4 未知語の産出文

調査対象者 B は未知語とした、「場所への到着」カテゴリーの「駆けつける」について(3)を産出しているが、類推には成功していない。

(3)　*駆けつけようとしたけど、彼は早すぎる。

(3)では、単に「駆ける」＋「つける」で原義を使用し類推したことが考えられるが、原義以外に含まれる「走り急ぐような思いで」というニュアンスまでは類推できなかったことが示唆できる。

6. まとめと今後の課題

本調査では以下のことが明らかになった。まず、JFL 上級学習者の複合動詞の認識程度や、学習歴(調査目的 1)では、複合動詞の認識は「2 つの動詞をあわせて作る」であることが分かったが、教師からの体系的な指導はない。新出複合動詞のストラテジーとしては、辞書が挙げられているが、ほとんどの場合、辞書では役に立たないことが分かった。複合動詞の習得困難点(調査目的 2)では、学習者は複合動詞理解において前項動詞＋後項動詞の類推に頼っているが、類推不可能なことも多く困難が示唆された。また、単純動詞「つける」の原義に近い意味理解がある場合は複合動詞の類推が容易な意味カテゴリーもあるが、周辺的な意味から捉えている場合は逆に類推が難しい可能性があること、単純動詞と複合動詞の意味的な差異が分からず、意味把握が困難であることが分かった。

本調査では松田(2000)の結果がほぼ実証されたが、今後は①人数を増やし一般化をはかる②学習者の持つ単純動詞「つける」の原義が、学習者の類推に与える影響をみたい。

注

1. 語彙調査項目については、表 1 を参照。
なお、姫野(1999)では、8 項目(場所への到着、対象への接着・密着、対象への指向―完全な接触を目指す―、対象への強度の接触指向、強調、対象の捕捉、状態移行、習慣)に分けているが、本稿では、姫野(1999)が「つける」の本義としている「接着・密着」を考慮して 6 項目に絞った。
2. 調査時、前項動詞については A,B ともに既知である、という回答を口頭で得ている。

参考文献

姫野昌子(1975)「複合動詞『～つく』と『～つける』」『日本語学校論集』2　52-72 東京外国語大学

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

松田文子(2000)「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20 号、52-65

松田文子(2002)「日本語学習者による複合動詞「～こむ」の習得」『世界の日本語教育』12、43-62

森田良行(1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』早稲田大学語学教育研究所　69-86

武部良明(1995)「複合動詞における補助動詞的要素について」『金田一博古稀記念　言語・民俗論業』三省堂

さの　かおり／お茶の水女子大学大学院　日本語教育コース

BYG12117@nifty.ne.jp